

加藤 薫著

## 『21世紀のアメリカ美術 チカーノ・アート』

― 抹消された<魂>の復活 ―

(明石書店・2002年・本体4,600円＋税)

神奈川大学外国語学部 新 木 秀 和

越境や混交といった用語が現代文化を読み解くキーワードだとすれば、チカーノ・アートにこそ、それらは当てはまるのかも知れない。もちろんそこには、民族性や歴史性という側面が欠かせないだろう。しかも日本、欧米……という円心的な区分から外れてしまって日本に専門家がほとんどいない領域。そうしたチカーノ・アートの世界がかくも活力と魅力、創造性に満ちた世界であることが、本書によって初めて日本に紹介された。

ところで、チカーノとは何か。本書第1章に説明されるように、それはメキシコ系アメリカ人と同義ではなく、むしろ「圧倒的なアングロ・アメリカンの支配体制と対決し、平等や自由といった権利を獲得するとともに主体性を復活させたいと願い叫ぶ<魂>を共有する人たち」(34-35ページ)のことで、チカーノ・アートには「そういったチカーノたちの魂の叫びを表現し、メッセージを同朋に伝え、歴史の記録として残していくという目的」(35ページ)があるという。つまり、チカーノ（・アート）とは、その存在自体が既存の文化史や社会観を揺さぶる象徴的な記号であり、本書の副題が語るように、チカーノ（・アート）を対象とする行為はそのまま、隠蔽されてきた<魂>の叫びを再生させる試みとならざるをえない。したがってそうした作業は、美術（史）研究に終始すれば可能となるものでもない。むしろ、メタ美術（関係の止

揚）とでもいうべき側面を内在させており、美術（史）にこだわりつつ、同時にそれを超える境位に立たねば、かかる行為は成立しないだろう。つまり本書は、これまで幾多の<魂>の作品群を生み出してきた著者だからこそできた力業というべきなのである。

『メキシコ美術紀行』（新潮選書）にはじまり、『ラテンアメリカ美術史』（現代企画室）、『メキシコ壁画運動』（平凡社）、そして『ニューメキシコ―第四世界の多元文化』（新評論）、『キューバ★現代美術の流れ』（スカイドア）といった単行本の流れ。通奏低音としてそれらの作品で蓄積された知見が、在外研究の成果を加えつつ、本書『チカーノ・アート』へと流れ込み、新たな作品として世に問われた。別言すれば、ラテンアメリカ美術の概観を出発点としつつも、メキシコ、ニューメキシコ、キューバなどと時空間的に移動するフットワーク性をそなえ、しかしそれだけでなく、「壁画運動」「第四世界」「チカーノ」といった魅力的で生命力あふれる存在と関係を対象として、既存の概念（国家、美術などの制度や枠組み）を脱構築しようとする執念と熱意とが、著者の中で充溢してきたからこそ、本書が生み落とされたのである。

本書がフロンティア追求の書であることはまちがいない。と同時に、丹念かつ豊富に本書に収められた資料群の価値も極めて高い。日本語で初めて紹介される作品が大

半を占めるという資料集の性格が、そこにはある。こうした特長に目を注ぎながら、本書の内容を紹介していこう。

454ページにおよぶ本書には様々な内容が盛り込まれている。まず第1部「チカーノ・アート」(27-260ページ)では、第1章でチカーノの定義と内容が明らかにされ、本書の中核をなす第2章と第3章においては、「チカーノ・アートの誕生」および「チカーノ・アートの流れ」が縦横に論じられている。もちろん、そこで論じられるのはチカーノの位置であり、チカーノ・アートの形成と発展なのだが、同時に、アメリカ合州国やメキシコといった国家の境目にあり、それを脱構築する力を秘めた「第四世界」の隠された歴史と現在とが浮かび上がってくる。この意味で、本書第1部は「もうひとつの(北)アメリカ史」を描く試みでもあるといえよう。

後半の第2部(261-436ページ)は「チカーノ・アート資料」と題され、主要なアーティストの詳細なデータや用語解説と、年表が掲載されている。これは本書の3分の1の量を占めており、資料提示の重要性に対する著者の認識を反映したものであろう。ここで1つだけ、ないものねだりの注文を許してもらえば、関連年表は1992年までの記述で終わっていて、1990年代の状況がまとまって読み取りにくいのは残念だ。参考文献などの制約のためかも知れないが、「21世紀のアメリカ美術」とタイトルにある以上は、実際の21世紀につながる現時点(本書執筆時)までの事項を掲載してほしいかった。

もちろん、ステレオタイプのアメリカ美術(史)に挑戦する本書の魅力はその文章だけに求められるのではない。豊富に収められた図版そのものがメッセージを発している。実際、220点にもものばる図版が採用

されており、キャプションをながめながら、個々の作品の意味を読み取る楽しみが、読者に委ねられる。たとえば図版を通して鑑賞し、キャプションを通読するだけで、何か伝わってくるものがある。静寂と躍動、喜び、悲しみ、怒り、希望、驚き……何かしら見てはいけない、隠されてきた秘密のベールをのぞいてしまったような、はっとする感じや不思議な感覚を抱かずにはいられない。採録された写真(白黒の縮小版)でもそうなのだから、実物がもつ生々しさはどれほどだろうか。

研究の空白を埋めるだけでなく、21世紀のアートや文化状況を予見させるマニフェストとして、本書を読むことができる。解読の対象として尽きせぬ魅力をはらみ、多様な解釈に開かれたチカーノ・アートの世界。そのみごとな作品群の生きざまを、人間存在と歴史の奥底を透徹する視眼と筆致で紡ぎ出していく著者の淡々とした情熱。本書は、美術にかかわる専門家だけでなく、文化や歴史、マイノリティ、アメリカ(大陸)などのテーマに関心をもつすべての人びとに開かれている。一読を勧めたい作品である。